

## 奥日光の現代史（1945年～）

第二次世界大戦直後から現在に至るまでの特徴の一つは奥日光への観光客が急増したことである。その第一波は、中禅寺湖の北岸に保養基地を設けた連合国軍の兵士たちだった。もう一つの特徴は、観光客が乗り込んできた自動車と、それを支えるためのインフラである。この時代のもう一つの決定的な側面は、1970年に環境意識が高まり、地域の自然資源を守るために行動を起こす必要性が認識されるようになったことがあげられる。

戦後20世紀半ばの奥日光は、日本の他の地域と同様に苦難の時代であった。慢性的な食糧不足が問題となり、戦場ヶ原の湿地は一時的に畑作用に干拓されたが、最終的には元の状態に戻った。時が経ち、国家レベルから個人レベルへと景気回復が進み、自動車を購入できる人が増えてきた。ドライブは国民的な娯楽となり、自家用車で奥日光を訪れる人も増え、道路や駐車場の整備が必要となった。

1960年代には、中禅寺ダムや湯ノ湖の水質保全のための下水処理場の建設など、多くの公共工事が行われた。

1970年代以降、環境に対する意識が高まり、奥日光の自然資源を守る必要性が認識されるようになった。国家レベルでは、1974年に自然保護法、1993年に環境基本法が制定された。1995年には、奥日光がグリーンダイヤモンドプロジェクト地域に指定されました。

奥日光には豊富な河川、湖沼、沼地があり、これらの自然資源を守るために様々な施策が展開されています。環境省では、奥日光の湖沼や河川の水質調査を数多く実施し、水質改善のために湯ノ湖の定期的な浚渫を実施しています。2005年には、湯ノ湖、小田代ヶ原、戦場ヶ原を含む260ヘクタール以上の土地が、ラムサール条約に基づく「奥日光湿原」として登録されました。

### ・日光観光ホテル

中禅寺湖の象徴的なランドマークで、1947年に連合国占領軍のために日光観光ホテルが湖畔のリゾート施設として建設したものです。1949年にホテルは焼失しましたが、ボートハウスは生き残っています。1996年までホテル再建後はレストランとして利用され、1999年に栃木県が取得した。そして、修復して2002年にオープンされていました。

### ・中禅寺湖ボートハウス

中禅寺湖の象徴的なランドマークで、1947年に連合国占領軍によって湖畔のリゾート施設として建設された。1950年にホテルとボートハウスが焼失し、当時のままの計画で再建されました。

### ・湯元温泉の湯めぐり

1951年には、湯本温泉の源泉から中串地区に水を運ぶための12kmのパイプラインが敷設され、中禅寺温泉が誕生した。

### ・いろは坂有料道路

自動車による観光客の増加に対応するため、奥日光への道が整備され、1954年にはいろは坂有料道路として開通しました。昭和40年にはもう一つの道路が開通し、上り下りともに片道通行が可能となった。1984年に無料になった。

・湯ノ湖の浚渫

湖底の水質悪化とヘドロの発生に対応するため、1966年に公共下水処理場が建設された。湖は1992年～1996年に浚渫され、ここに示すように湖底からヘドロが除去された。

・低公害バス

低公害バスは1993年から奥日光内で使用されており、赤沼から小田代ヶ原、千住ヶ浜まで運行されています。